

---

# 大切なのは中身

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切なのは中身

### 【Nコード】

N5705H

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

鈴木薫は行き着けのクレール屋の女の子に夢中、その娘のどこに一番夢中かという。性格美人、これこそ最強です。

## 第一章

大切なのは中身

彼が彼女に惚れたのはもう結構前のことだ。

「いや、可愛いよな」

「まあ可愛いよな」

「そうだよな」

皆それは認める。彼こと鈴元薫はまずその長身をやけに屈めて皆に話すのだった。四角い顎が特徴的で目元が優しい。黒い髪を横は切り上をぼさぼさ気味にしている。黒い服がとても似合っている。

「そうですね。だから私も好きなわけです」

「けれどそれでもな」

「ちよつと今の御前は有り得ないぞ」

しかし皆は呆れてこう彼に話すのだった。

「何ていうかよ、でれでれしてよ」

「佳澄ちゃんだったか？」

「はい、佳澄ちゃんです」

今度は彼女の名前を皆に話すのだった。

「この娘ですよ」

「この娘って御前何時の間に」

「何撮ってたんだよ」

首にかけてあるロケットを開くとそこから彼女の写真が出て来た。ふつくらとした顔で幼い顔立ちの陽気な顔をしている。目元がかなり笑っている。笑っているだけでなくとても優しく純粋な顔立ちである。黒い髪を長くストレートにしていることもわかる。しかしただのストレートではなく頭の左右を団子にしている。それがまた可愛さを余計に引き立てている。

「いや、この前たまたま撮ることができまして」

「たまたまねえ」

「たまたまでそんないい写真撮れるか？」  
皆ここでまた彼に突っ込みを入れた。  
「思いきり狙ったみたいに笑ってるじゃねえかよ」  
「何時撮ったんだよ」  
「この前御願いしたら撮らせてくれました」  
しかも言っていることがさつきまでとは微妙以上に違っている。  
「佳澄さんがアルバイトに行かれてるあのクレープ屋さんで」  
「そういえばこの服って」  
「そうだよな」  
周りはそのロケットに映っている彼女を見てまた話す。  
「あの店の制服だよ」  
「間違いないな」  
「だよな」  
見れば黄色と白の明るい服である。全体像ではないのでその全ては見えないがそれでも黄色と白の制服なのはわかるのだった。  
「それで撮らせてくれたのかよ」  
「頼んだら」  
「まさかとは思いました」  
薫は相変わらずそのロケットを見ながら話す。  
「けれどこうやって撮らせてもらって」  
「有り得ないよな」  
「っていうか御前やつぱりあからさまに変だよ」  
皆はまた呆れた顔で彼に告げる。しかし本人の耳には入らない。  
「まんまストーリーカーじゃねえか」  
「しかも正面から堂々とかよ」  
「凄く優しくて心の清らかな人なんですよ」  
しかし薫はそれでも言うのだった。  
「そう、とても」  
「だろうな。いきなりこんなごついのが出て来てそれでも普通に応えてくれるんだから」

「しかも写真まで撮らせてくれてよ」

写真でも満面の笑みを浮かべている。本当に実にいい笑顔である。

「やっぱりいい娘なんだろうな」

「顔もいいしな」

「可愛いだけじゃないですよ」

薫はまた言うのだった。相変わらずロケットの中の少女を見ながら。

「心が。とても」

「いや、それはわかるけれどな」

「けれどそれでも今の御前はな」

皆とにかく呆れている。しかし彼の耳には入っていなかった。

「おかしいどころじゃないからな」

「そこまでいいのかよ」

「いいなんてものじゃないですよ」

うつとりとして話すのだった。

「この彼女がいてくれて。天使ですよね」

「天使かよ」

「こりやもつ言っても無駄か？」

しかしこつは言っても言わずにはいられない面々だった。

「けれどそこまで好きになるのは何なんだ？」

「可愛いのはわかるけれどな」

「可愛いだけじゃないですから」

やはりここでも周囲を見ているのだった。

「佳澄さんは」

「それで今から行く場所はよ」

「こつちつてよ」

皆今進んでいる道はそのクレープ屋への道だった。皆かなり憚然としながらもそれでも薫に付き合っつてその道を一緒に進んでいるのだった。

## 第二章

「あれじゃねえか。あの娘のクレープ屋への道じゃねえかよ」

「また行くんだな」

「毎日でも行きますよ」

彼は言う。

「本当にね。毎日でも」

「じゃああの店にアルバイトに行ったらどうだ？」

「今御前おもちや屋でアルバイトしてたよな」

「はい、してます」

それで金があるのである。彼女のクレープ屋に毎日行くだけの金  
が。

「ですがまだ時間に余裕がありますし。大学のことも置いておいて」

「それじゃあやっぱりか」

「行くんだな、あの店にも」

「佳澄さんと一緒にいられるのなら」

皆の言葉にすぐに乗ってしまっていた。

「行きます、絶対に」

「何かどんどんあれになっていつてるな」

「どうしたものだよ」

「けれどそれでも私は」

薫は真剣な顔で言った。

「あの人が好きなんですよ」

「向こうはどう思ってるんだらうな」

「そうそう、それぞれ」

そのことも話す。皆何だかんだであれこれと世話を焼いていた。

「とにかく性格はいいみたいだけれどな」

「性格美人か」

「その性格がとても奇麗で」

薫はここでまた言うのだった。

「私はそれがよくて」

「いや、もうそれはいいからよ」

「つていうかずっとのろけてるよな、御前」

「駄目ですか？」

言われてもこんなふうに戻す。やはりそれでも言葉は変わらない。

「それは」

「駄目っていうかよ。そこまで惚れるか」

「というかそこまで惚れることができるんだな」

また言う一同だった。

「しかしそれでもだよ。まあ頑張れ」

「俺達は応援しないでもないからな」

何処か素直ではないがそれでも言う彼等だった。そんなことを言っている間にそのクレープ屋に着いた。するとその彼女が店の可愛い制服を着てそのうえで店のカウンターにいた。

「いらつしゃいませ」

「は、はい」

薫が最初に彼等に答えた。

「こんにちは」

「こんにちは」

佳澄は満面の笑顔で挨拶を返す。皆薫の後ろにいてそのうえで色々と思っていたがそれでもそれは言わずただ後ろについているだけであつた。

「御注文は？」

「バナナとバナナのを下さい」

薫はかなりどきどきした顔で述べるのだった。目はずっと佳澄を見ていてしかもかなり笑っている。一步間違えれば不審者そのものである。

「他の方はどれを注文されますか？」

「まあ僕達もそれで」

「御願います」

「わかりました」

天使の様に清らかな声で彼等にも応える。そうして手慣れた素早い動きでクレープを作っていきそれを薫達に差し出す。彼等はそれを受け取ってから店を後にする。そうして立ちながら食べて話をするのであった。

「美味しいですよね」

「ああ、確かにね」

「滅茶苦茶美味いよ」

先程歩いた道を引き返している。そうしてそのうえで話をしている。

「しかも安いしな」

「愛情がこもっていますよね」

またここで薫が言うのだった。

「これって凄く」

「またはじまったよ」

「どうしたもんだよ」

皆彼の言葉を聞いてクレープを食べながらここでも呆れた顔になる。そののろけは何度聞いてもそうなるものであった。

「本当によ。愛情ってこれお店のやつだぞ」

「あの娘が焼いたやつだけだな」

「あの人が焼いたクレープだからですよ」

見れば薫はそのクレープを何枚も持っている。そうしてにこにことして食べているのであった。一枚食べればまた一枚、次々と食べていく。

「こんなに美味しいのは」

「御前そこまで食っていいのかよ」

「太ったらあの娘にもてないぞ」

「大丈夫です、毎朝二十キロ走ってますから」

しかし薫はこう返すのだった。

「筋力トレーニングもして。体型は維持しています」

「そこまでして食うか」

「しかもあの娘に合う為に」

「何だってしますよ」

有無を言わさぬ一直線の言葉であった。

「私は何でも。あの人の為なら」

「何枚も食ってかよ。しかも毎日」

「よくやるよ」

「天使に会えるんですから」

今度はこれであった。

### 第三章

「それだけのことはありますよ」

「天使ねえ。そこまで言うか」

「あの笑顔がか」

「女神ですよ」

天使の次は女神である。最早誰にも止めることができなかつた。

「もう本当に。清らかで優しくして」

「こりゃもう何処までも行くな」

「とことんまでだな」

「明日面接行きます」

薫はあの店への面接のことも話した。

「絶対に」

「っていつか今日行ったらどうだ？」

「そうだよな」

皆ここで彼に突っ込みを入れた。

「さもないと他に誰か入るぜ」

「佳澄ちゃん可愛いからな。そうしたら」

「えっ、それは」

皆の言葉を聞いてぎょっとした顔になる薫だつた。

「それってつまり。佳澄さんが」

「ほらほら、今にも来てるかも知れないぜ」

「そうしたらよ」

「それはいけない」

皆の言葉はからかいだつた。しかしそれは薫にとっては予想以上の反応を起こす結果となつてしまった。彼はすぐに回れ右をしてそのまま店の方へダッシュで戻って行つた。

「っておい」

「いきなりかよ」

「しかも何てスピードだよ」

皆その彼が駆けていくのを見て唾然とした顔になる。砂埃まであげとんでもないスピードで駆けている。その姿は忽ちのうちに消えてしまった。

「行ったな」

「で、面接か」

「合格するかね」

そもそもその問題もあるのだった。

「面接しても。どうなのかね」

「しなかったら大騒ぎになるだろうな」

「っていつか大騒ぎを起こすな」

予想される未来であった。

「若しそうならな」

「だよな、確実にな」

「お店の人もわかってるだろうしな」

「いや、わかってない人いないだろ」

このことも極めて容易に想像できることであった。

「あそこまでからさまでよ」

「それもそうか」

「そうだな」

皆仲間内の一人のその言葉に頷いた。

「だったらこれで毎日あの娘と一緒にか」

「あいつにとつちや天国だな」

「もう店の中にいる時の顔まで想像できるな」

呆れながらの言葉が続く。

「しかしまあ。どうしたもんだよ」

「だよなあ。あの朴念仁が」

「あそこまで夢中になつてな」

実は薫はこれまで誰かを好きになったことはない。しかし今の彼は明らかに暴走して佳澄に夢中になつてしまっているのである。

「あの店に入ってその瞬間だったからな」

「一目惚れだったしな」

「そのままな」

それで今に至るのだ。そして今に至る。薫はそのままバイトの面接に行きそのまま彼はクレープ屋のバイトもはじめるのだった。

皆が店に行くと言面々の笑みの薫がいる。その声もまた実に明るい。

「いらつしやいませ」

「すげえ幸せそうだな」

「もう満足してるみたいだな」

「満足どころじゃないです」

側にはその佳澄がいる。始終その彼女を見て笑っている。

「天国にいる気分ですよ」

「そうか、天国か」

「そこまで言うか」

「いや、天国ってこの世にあるんですね」

その一方的なおのろけが続く。

「嬉しいですよ、本当に」

「それはわかったからよ」

「クレープ。欲しいんだけどよ」

「あつ、はい」

彼は早速その大きな手でクレープを作りはじめる。彼が皮を焼きそのうえで佳澄がその皮を受け取って包む。そうやって二人で作っていた。

## 第四章

皆はその作る様子を見て。こう言うのだった。

「あれっ、いいじゃねえか」

「いい感じで出来てるよな」

「佳澄さんがいるおかげですよ」

薫はその佳澄の横で話す。

「僕はただ焼いてるだけですよ」

「焼いてるだけっていつかよ」

「皮を焼くことこそが難しいんじゃないのか？」

「なあ」

皆は自分の功績ではないという薫に対してまた言う。

「っていつか御前本当にはじめてか？」

「随分手馴れてるけれどよ」

「何でそんなに上手いんだ？最初なのによ」

「鈴元さん凄く努力されたんですよ」

佳澄が皆に話してきた。

「それでなんですよ」

「いえ、私は全然」

しかし薫自身はこう言うのだった。話は平行線になっていた。

「高坂さんに教えてもらったおかげで」

「高坂さんって？」

「誰なんだよそれ」

皆はその高坂という名字に眉を顰めさせた。その間に佳澄からそれぞれクレープを受け取る。そうしてそのうえで食べるはじめるのだ。つた。

「はじめて聞く名字だぞ、おい」

「誰なんだよ、本当に」

「私です」

ここで佳澄が言ってきた。

「私の名字なんです」

「えっ、そうだったの？」

「あんたの？」

「はい、御存知なかったのですか？」

薫がその彼等に問うた。

「前にお話しましたけれど」

「初耳だぞ、おい」

「そんなの何時話したんだよ」

皆眉を顰めさせて彼に突っ込みを入れた。

「お話しませんでした？」

「だから聞いてねえって言ってんだろ」

「いつも聞くのっていつたらよ」

おのろけだろうと言おうとした。しかしそれを今言おうとしたその時だった。その佳澄が皆に対して言ってきたのであった。

「それです」

「あっ、ああ」

「それで何かな」

「鈴木さんってすごい努力家なんですよ」

佳澄はその天使の如き清らかな笑みでまた皆に話すのだった。

「毎日熱心に練習されて。お掃除とかも一番頑張っておられるんですよ」

「まあそれはわかるけれどな」

「こいつ真面目なことは真面目だからな」

それは皆わかっていた。彼等にしろ薫のことはよく知っている。

当然その真面目なこともだ。それで知っているのであるがそれでもだった。

「けれどそれでもな」

「その緩みきつた顔どうにかならねえのかよ」

「緩んでますか？」

その薫は全く自覚していなかった。

「そんなに」

「緩んでるよ、思いきりな」

「どうにかしろよ、それ」

「見ているこっちが恥ずかしいぞ」

皆こうまで言う。しかしだからといってその顔が元に戻るわけではない。本来は整っていると言っている顔なのだが今はそんなことは全くなかった。

「しかしそんなに幸せかよ」

「そこまでか」

「ですから幸せどころじゃなくてですね」

薫のろけは止まることがなかった。

「もう天国にいてですね。このままずっと生きていたいです」

「やれやれ。こりゃ付ける薬はねえな」

「どうしたものだよ」

皆呆れ果てていた。しかしそれでもクレープは食べている。クレープを食べながらそのうえでのろけを聞いていた。この場は最後までそれを聞いてそのうえで立ち去りはする。しかしそれでもその帰り道で薫に対してあれこれと話しざるを得なかった。そうしないではいられなかった。

「完全に病気だな」

「恋の病だな」

口を尖らせて言うのだった。

「ありやどう見てもな」

「付ける薬はないよな」

「どうしたものだよ」

皆で言う。そしてそのうえで一人があることに気付いたのだった。

「そういえばよ。あいつはあれだけれどな」

「ああ」

「向こうはどうなんだ？」

ーじつ話すのだった。

## 第五章

「向こうはよ。どうなんだよ」

「ああ、佳澄ちゃんかよ」

「そうだよ。あいつはあれだろ」

言つまでもなく薫のことである。

「あいつはよ。けれど恋つていうのはあれだろ？一人じゃできないだろ」

「あいつはもう一人で何処までもいつてるけれどな」

「それでも二人が必要だぜ、こつという話はな」

このことが話されるのだった。皆話をしながら歩いている。道はごく普通の道路に面した道であるがそれでも話していることはいささか普通のものではなかった。

「だからよ、彼女はどうなんだよ」

「ああ、そうだよな」

「それだよな」

皆もここで頷くのだった。彼女がどういつ考えなのか。それが問題だった。

「気付いてないとかは」

「それは絶対にない」

このことは真つ先に否定された。

「絶対にない」

「それはないか」

「あれだけあからさまなんだぞ」

まずは薫のその有様であった。

「でれでれしてよ。毎日店に来たりわざわざアルバイトに入ったり。あれで気付かない奴いるか？」

「いや、絶対にいねえ」

「誰でもわかるレベルだな、あれは」

その通りであった。それはまさに誰でもわかるレベルであったのである。

「だよな、じゃあやっぱりあの娘も」

「気付いてないわけねえだろ」

「これもすぐに察しがつくことであった。」

「むしろ気付いていなかったらおかしいぞ」

「やっぱりそうか」

「そうだよ。絶対にな」

「このことが強く確認されるのだった。」

「それにな」

「それに？」

「あの娘結構以上に賢いぞ」

佳澄自身のこと話されるのだった。恋愛は一方からのみで成り立つものではない。もう一方もあってそれからなるものである。だからこそ佳澄のこと話されるのだった。

「気付いてないわけないだろ」

「そうか、けれど何で何でもないような顔してるんだ？」

次に引っ掛かるのはこのことだった。

「あの娘何でもないって顔だよな」

「ああ、確かにな」

そうなのだった。佳澄は横にいつも薫がいてにこにこしていても何も無いように落ち着いている。そうして普通にアルバイトを続けているのである。

「本当に何でもないって感じだな」

「好きなのか？それとも」

「続いてこのことも考えられる。」

「嫌いなのか？どうなんだ？」

「さてな。その辺りが一番わからないんだよな」

「そうだよな」

皆ここで首を傾げさせてしまった。このことが一番重要なのであ

るが残念なことにこのことこそが最もよくわからないことなのである。

「どうなんだ？ほんとうに」

「嫌いだったら態度に出ないか？」

一人がこう言った。

「やっぱりな」

「じゃあ好きなのか？」

嫌いでなければこれだった。結局のところどちらかしかない。恋愛というものは極論すれば二元論だからだ。どちらかしかないのである。

「あいつのことが」

「悪い奴じゃないけれどな」

今度は薫の話にもなる。

「性格は穏やかだし親切だしな」

「背も高いし顔もまあいい」

彼は実はそんなに評判の悪い男ではない。むしろ仲間内でも学校でも評判がいいのである。性格と容姿で悪く言われたことはない。

「大学の授業も真面目に出てるしな」

「悪いところはないよな」

こう話されるのだった。とにかく評判は悪くはない。

「じゃあ付き合うにはいいよな」

「だよな。バイトだって手を抜かないしな」

彼のことも確認される。しかしであった。

「けれどどうなんだ？今のあいつってよ」

「まんまストーカーだよな」

「完全にあれだけ、あれ」

皆の顔が顰められる。彼に対する言葉が変わってきていた。

「もうよ。砂場で遊ぶ女の子を見る目だよな」

「そのものだな」

かなり酷いことを言われる。しかしそう言われるだけのものが確

かにあつた。今の薫は完全に危ない目になってしまっているのだ。恋の病のせいで。

「そんな人間が横にいたらやっぱりな」

「嫌だよな」

「なあ」

このことも言われるのだった。

「やっぱりな。それはな」

「じゃああの娘は嫌なのか？」

話が戻ってしまった。

「あいつと一緒にいるのが」

「そうじゃないのか？」

「いや、だったらもうとっくに行ってるだろ」

しかしここでまた話されるのだった。話は堂々巡り気味になっていた。

「とっくの昔にな。近寄るなとかな」

「何せ客だった頃からあんなのだったからな」

その時からなのはもう皆知っていた。毎日クレープを買いに来て覗きに来る。そのことも知っているからこそ言える言葉であった。

## 第六章

「けれど何も言わないからな」

「じゃあやつぱり好きなのか？」

「どうなんだろうな」

皆で首を傾げるのだった。そんなことを考えながら今は答えを出せない彼等だった。しかしここで話が動いた。薫は佳澄にあるものを出してきたのである。

「あの、これ」

「これって？」

「これ。どうぞ」

バイトの時間が終わってすぐだった。彼は店の裏で彼女にそれを差し出したのである。店の裏は食べ物や商売用の品や調理品が色々置かれ結構雑然としている。しかし彼がここで差し出したものは赤と白の包装が為されピンクのリボンで括られた小さな箱だった。

「よかつたらですけれど」

「これって？」

「ええとね」

薫はその大きな身体をもじもじとさせていた。そうしてそのうえで佳澄に対して話すのだった。

「ブローチです」

「ブローチ？」

「うん、ちよつと。お金が溜まりましたから」

ここで嘘を言うことができたが言わなかった。それをしないのが薫である。

「だから。高坂さんに」

「そうなんですか」

「あと。これ」

また別のものを差し出してきた。今度は二枚のチケットであった。

それを彼女に対して差し出してきたのである。

「これもよかったら」

「これは」

「映画のチケットですけど」

「それだといふのである。」

「これも。よかったら」

「映画なの」

「ほら、高坂さん前にチーフと話してましたよね」

「アルバイトのチーフである。フリーターで薰より二つ年上である。」

「だから」

「私となのですね」

「駄目ですか？」

「言葉が緊張したものになっていた。」

「やっぱり。駄目かな」

「有り難うございます」

「しかしここで佳澄は。にこりと笑って彼に告げたのだった。」

「それでは喜んで」

「喜んで？」

「告白ですよね」

「そのにこりとした笑みで彼を見上げての言葉である。」

「これって」

「まあそれは」

「待ってましたし」

「今度はこっきたのだった。」

「ずっと」

「ずっとっていうと」

「ですから。私のこと好きなんですよね」

「ペースはもう完全に彼女のものだった。主導権を握ったまま進めてくる。」

「ずっと。ですから」

「あの、まあそれは」

「映画。一緒に」

やはり彼女のリードのまま話が進んでいく。

「行きましよう。それでですね」

「はい。それで」

「ブローチも」

これにも話が及ぶのであった。

「よかったら」

「薫さんの御心ですね」

「そう思っ頂けたら嬉しいです」

薫は心からその言葉を出した。

「本当に」

「そうですね。私はですね」

佳澄は天使の如き微笑みを浮かべている。その微笑みのまま薫に語る。

「薫さんの御心を受け取れて嬉しいです」

「私のですか」

「そうですね。その御心が」

「こう語るのだった。

「嬉しいんです。本当に」

「高坂さん、貴女は」

「ブローチも受け取らせて頂きます」

「そしてこう答えるのだった。

「喜んで」

「有り難うございます」

「私でよければ」

そして今度は彼女から言うのだった。

## 第七章

「御願います」

「わかりました。それでは」

「はい」

こうして二人はようやく恋人同士になれた。皆がクレープ屋に行くところまで以上に満面の笑顔を浮かべた薫がいた。そうして佳澄も。

「おいおい、最高に幸せみたいだな」

「もう天国にいるみたいだな」

「天国はこの世にあるんですよ」

薫はカウンターの向こうから満面の笑顔で彼等に答えるのだった。

「この世になんですよ」

「何か宗教に目覚めたのか？」

「ひょっとしてよ」

「いえ、違います」

しかし彼はそうではないと言っただった。その佳澄の横で。

「わかったんです、やっと」

「わかったねえ」

「まあそう言う気持ちもわかるさ」

彼等にしろ二人の間に何があったのかはわかっていて。薫が告白して佳澄はそれを受け入れた。それだけのことだがそこにあるものは二人、とりわけ薫にとっては非常に大きい。

「それでも異常に嬉しそうだな」

「全くだよ」

彼等は今度は苦笑いになった。

「そんなに嬉しいのかよ、やっぱり」

「二人になれて」

「佳澄さんの御心も知ることができましたし」

「私もです」

そしてそれは佳澄も同じなのだった。彼女も薫と同じ笑顔になっている。

「薫さんのことを知ることができましたし」

「そうか。あんたもか」

「それを知ることができてか」

「薫さんの御心はとても素晴らしいです」

佳澄は言った。

「大切なものはまず心ですから」

「心か」

「まあそうだけれどな」

彼等もそれはわかる。心が悪くてはどうしようもないことは。

「それは御前もなんだよな」

「やっぱり」

「私は最初からそこを見ていました」

薫の返答はこうであった。

「佳澄さんはまず御心がとても奇麗ですから」

「だから好きになったっていうんだな」

「それでな」

「その通りです。佳澄さん程御心が奇麗な人はいません」

彼女しか見えていないのは相変わらずだがそれ以上になってしまっていた。今の彼は。

「本当に」

「まあおのろけはわかったさ」

「おめでとうとだけ言っておくさ」

皆はまた苦笑いを浮かべて彼に告げた。

「それじゃまあいいか？」

「クレープだけれどよ」

「あっ、はい」

「御注文は何ですか？」

二人はすぐに仕事の顔に戻る。その顔も実に明るい。

「そうだよな。アイスクリーム貰おうかな」

「バナナな」

そのバナナを受け取りながら話をする。クレープの中にあるそれは冷たいが確かに甘い。皆はそのアイスクリームを食べながら言うのだった。

「ったくよ、アイス食っても熱いぜ」

「妬けるな、おい」

「っていうか焼けるよ」

冗談めかして二人に言う。店の前でクレープを食べながら。

「まあいいさ。俺達もな」

「そんな性格のいい彼女見つけるか」

「佳澄さんは本当に素晴らしい方ですよ」

そしてここでまた薫がのろける。

「それは私が保障します」

「やれやれ、それでもな」

「これには参るな」

苦笑いのままクレープを食べ続ける。しかしそれでも笑っていることは事実だった。何故なら二人の心がわかったからだ。だからこそその笑顔であった。

大切なのは中身 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5705h/>

---

大切なのは中身

2010年10月8日15時52分発行